

No.	提 案 名	提案団体名		
		代表者氏名	所 属	
7	タガワ・リバーステーション ー田川とJR 宇都宮駅西口広場の一体的整備計画ー	宇都宮大学 安森亮雄研究室		
		羽部 竜斗	宇都宮大学大学院 工学研究科	
		指導教官 氏 名	安森亮雄	

1. 提案の要旨

かつて河川は、人々の生活を支え、また、運搬等の貴重な航路として都市の発展を支えてきたが、現代化による交通機関の発展などとともに、河川の役割は少なくなり、河川の価値は下がりつつある。しかし、個性を活かした都市の再構築が求められる都市型社会への移行に伴い、地域固有の資源である河川を活かしたまちづくりが各所で行われ、河川の価値が問い直されつつある。

宇都宮市の中心市街地を流れる田川も、治水を優先した護岸整備により親水性が失われかつてのような河川の姿は見られなくなり、都市空間との関係が希薄になっている。

本計画では、田川における河川空間と J R 宇都宮駅周辺の複数街区を対象とした一体的再開発計画を提示し、親水性向上による河川空間の有効活用により河川という地域資源を活かした都市空間のあり方を提案する。

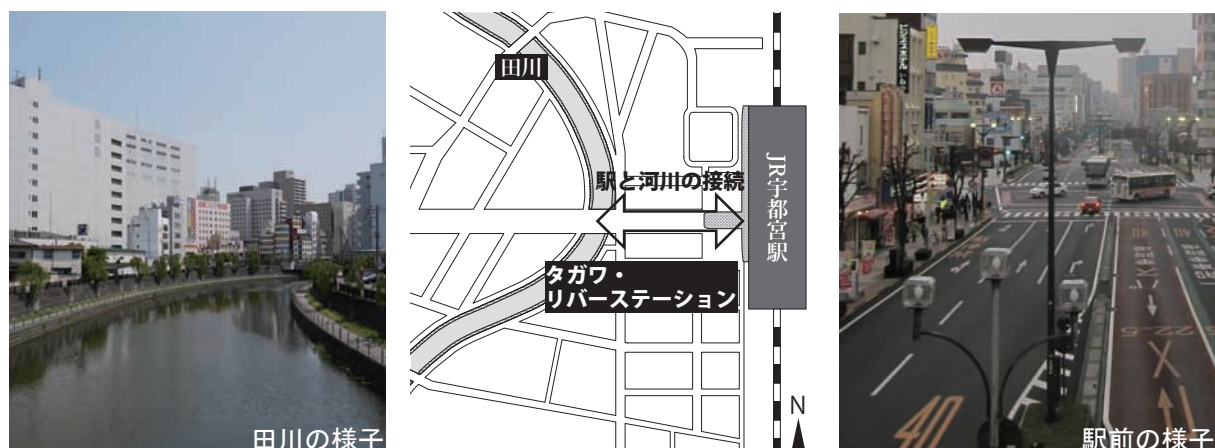


図 1：タガワ・リバーステーションの概要

2. 提案の目標

①田川と駅前空間の接続

街の顔であり、玄関口である駅前空間に於いて、街の個性である田川を感じる事はできない。本計画では、駅前空間に田川を引き込むようにして両者を接続することで、駅前から田川を体験できる空間を創出する。

②河川空間の有効活用法の提示

河川空間を広大なオープンスペースと捉え、親水性を向上させる整備を新たに施す事で、都市のにぎわいが河川空間に反映されるような都市空間との関係を築き、河川空間の有効活用を行う。

③都市拠点としてふさわしい都市像の提示

今後更なる発展が予想される JR コアとその周辺街区において、土地の高度利用や都市機能の補填等を施し、都市拠点としてふさわしい都市像を提示する。

3. 現状と課題

■田川について

かつての田川は、ボート遊びなどが行われるほど人々の生活と密接な関係があり、自然も豊かであった（図2）、しかしその一方で「暴れ川」という異名を持つほど大規模な災害を過去に幾度も引き起こしていた。その結果、治水を優先したコンクリート護岸による整備が施され、川と街の距離、河川敷と水面の距離が広がり親水性が失われ、田川は身近な存在ではなくなった（図3）。



図2. かつての田川の様子

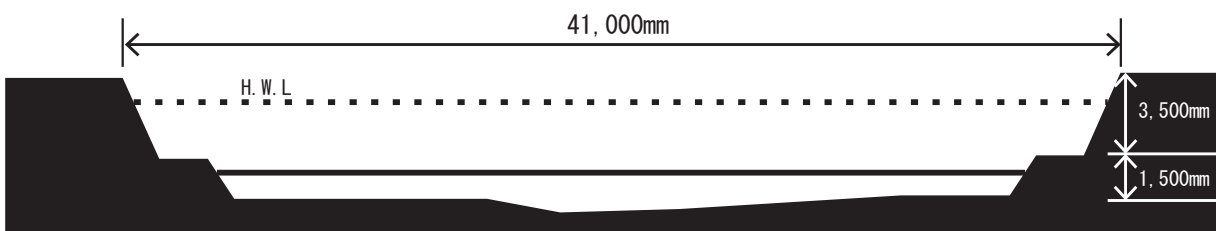


図3. 宮の橋付近の田川の横断図

《河川整備の事例》

・多自然型整備



いたち川（神奈川県横浜市）

河川全体の自然の営みを視野に入れながら、河川が本来もつ生物が生息・生育・繁殖しやすい環境や、多様な河川景観を保全・創出するために河川管理を行う手法。

・河床二層整備



釜川（栃木県宇都宮市）

豪雨に備えて河床を深く掘るだけでは、川との距離が遠くなるため、上部に適量の水を保つような二層構造とし、親水性を確保している。

■JR コアについて

駅西口周辺地区については、広域交通と域内交通が結節する交通の要衝に位置し、栃木県の政治・経済・文化の中心として発展してきた中心地区への玄関口であり、本市のさらなる発展に欠かすことのできない重要な地区として定められている。

現状では、土地の低利用が目立っているが（図4）、JR 駅の利用者の増加傾向（図5）やLRT の導入計画（図6）を検討している事からも、JR コア周辺の更なる発展が予想できる。また、中心市街地に交通弱者である高齢者が増える（図8）と共に、文化施設や音楽関連施設等の市街地にはない施設が求められ、旅行者からは観光案内施設などが求められている（図9）。

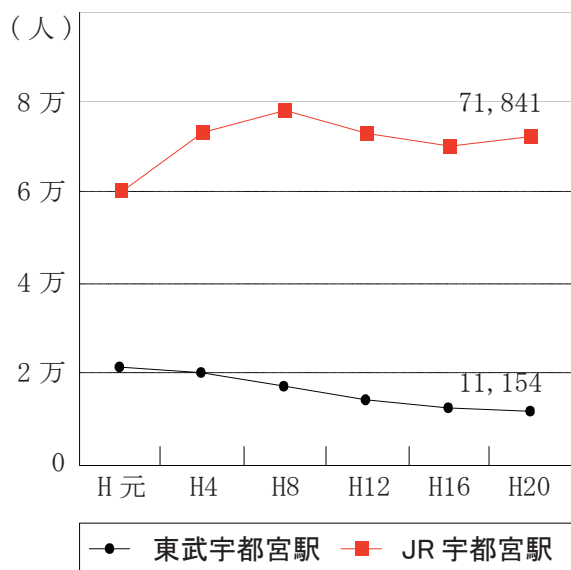


図5 駅利用者数の推移



図7. LRT の導入計画

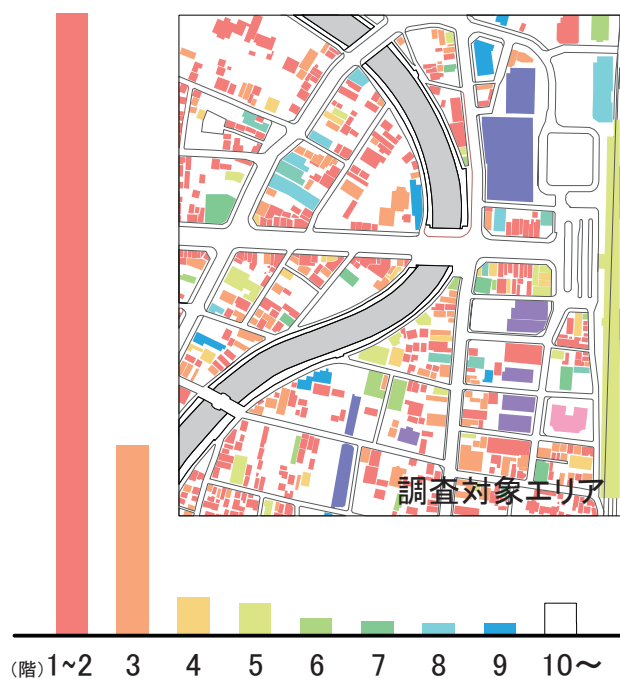


図4. 各階毎の建物の戸数

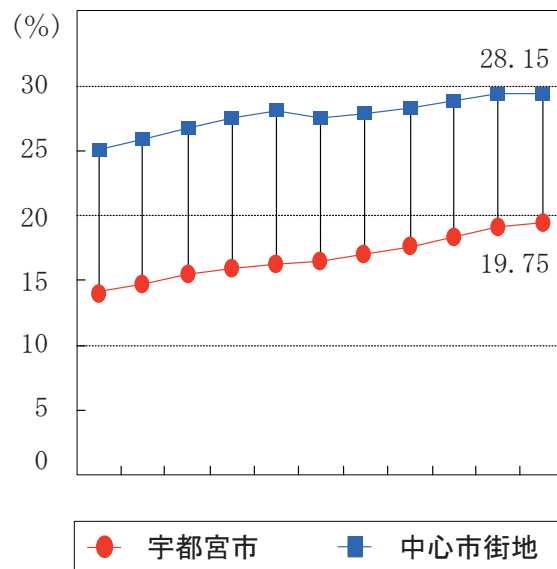


図6. 高齢化率の推移

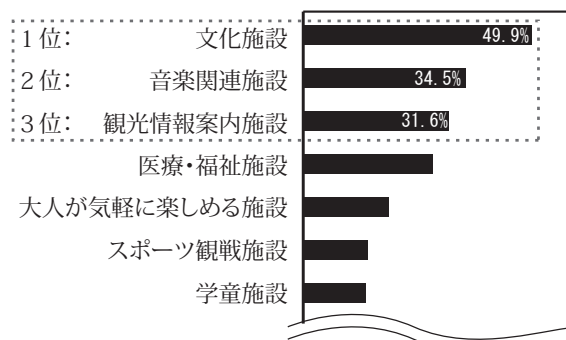


図8. 中心市街地に求める施設

（図5～8の出典：宇都宮市 HP <http://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/index.html>）

4. 施策事業の提案

■ゾーニングと建築用途

JR 宇都宮駅西口に面する街区（siteA）を中心に田川を挟むようにして、計5つの街区を選定し、計画を行う。計画にあたり、エリアを3つのゾーンにわけ、それぞれの特徴を活かし、建築の用途を決定していく。

・ゾーン1（対象街区：A）

→ 回遊強化ゾーン

大通りに面し、JR 駅と接する SiteA は街の玄関口として位置づける事ができるが、現状では街を回遊するシステムを有していない。理由として広場の不在が考えられるため、ゾーン1には広場を中心として、回遊と滞留を促す。

・ゾーン2（対象街区：B,C）

→ 都市機能ゾーン

都市機能の集中する JR コアと面するゾーン2は、河川との境界にもなっている。このゾーンでは、都市機能の拡張をしながら河川と街とのつながりを考慮した計画をする。

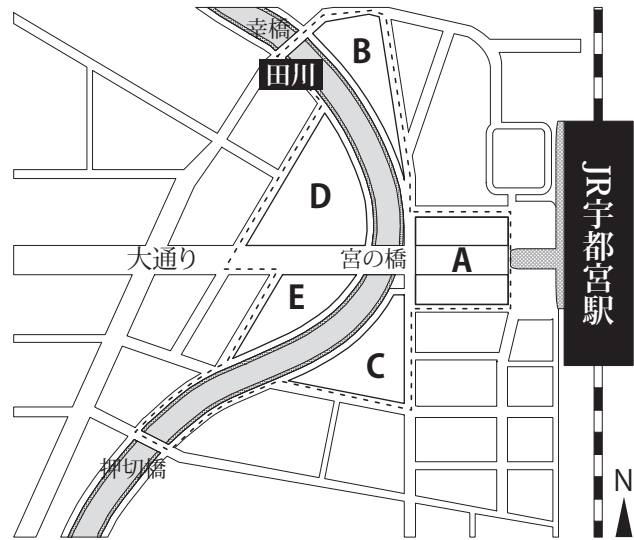


図 9. 計画対象地

・ゾーン3（対象街区：D,E） → 生活基盤ゾーン

住居用途の建物が集中するゾーン3では、更なる住環境の整備を進めるため、生活用品の購入ができる商業施設や中心市街地の人口増加に備えた大規模集合住宅を計画する。

■二つの制度利用

①『河川立体区域制度』を利用した河川空間の有効活用

・河川立体区域制度

適正かつ合理的な土地利用の確保を図るため、河川区域を地下又は空間について立体的に指定し、当該河川区域（河川立体区域）外については建築物の建築等の利用を認める制度。

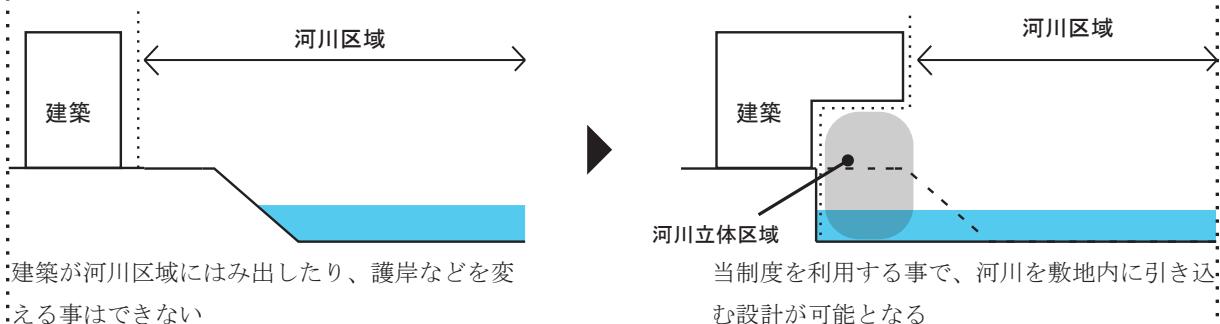


図 10. 河川立体区域制度について

当制度を利用し、河川区域を拡大することで、街へ河川空間を表出させ親水性を向上させる。

②『特例容積率適用地区制度（特例地区制度）』を利用した土地の高度利用

・特例容積率適用地区制度

複数の敷地間で建設する建築物の容積率を移転することが認められている地区。土地の有効利用などを目的に導入された建築基準法上の特例制度の一つ。

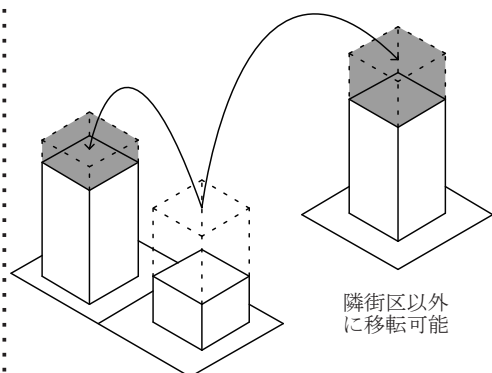


図 11. 特例容積率適用地区制度について

《特例容積率適用地区制度の事例》



図 12. 東京駅赤レンガ駅舎の保存・復元

復元費用などの捻出のため、当制度を利用し東京駅の保存・復元に必要な容積を残し、残りの容積を周辺地区に移転する事で容積の有効活用と費用を獲得をした。

当制度を利用して広場を創出し、その際に余る容積を多街区へと移転する事で、容積の有効活用をはかり土地の高度利用を促進する。

■多機能型河川整備

『建築と連動させるための整備』『河川の自然価値を高める整備』『都市空間との連続性を持たせるための整備』『河川水を有効利用するための整備』を行い、河川空間の有効活用を図る。

表 1. 多機能型河川整備の整備箇所

		河川空間の構成要素					
		遊歩道	護岸	階段	橋	河川水	
整備方法	公園型	○					建築と連動させるための整備
	自然型	○	○				河川の自然価値を高める整備
	劇場型			○			都市空間との連続性を向上させる整備
	環境型				○	○	河川水を有効利用するための整備

- ・公園型整備・・・建築と連動し、彫刻等の美術品の屋外展示を可能にしたり、ベンチ等において読書空間として利用できるようにすることで、公園の様に滞在できる空間を持たせる整備
- ・自然型整備・・・遊歩道、護岸に植栽を施し本来の河川の姿へと戻すような整備
- ・劇場型整備・・・護岸の傾斜を利用して階段状に整備する事で河川空間へのアクセスを容易にし、イスとしても利用する。橋を交通機能としてだけではなく、広場としての機能も持たせることで演奏スペースとしても使用できるように整備
- ・環境型整備・・・計画する橋に対しては、マイクロ水力発電などの設備を付加し、分散型のエネルギー資源として機能するように整備する

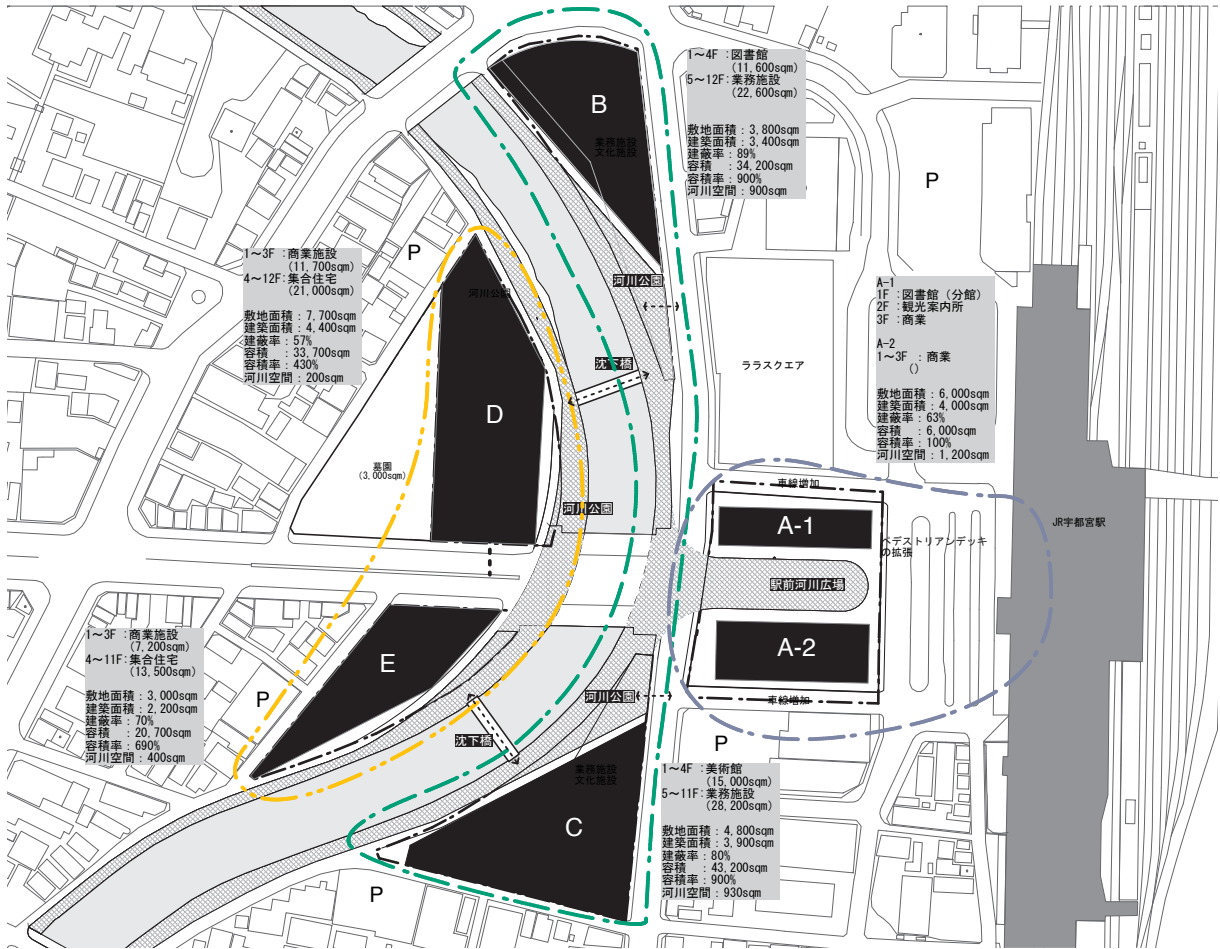
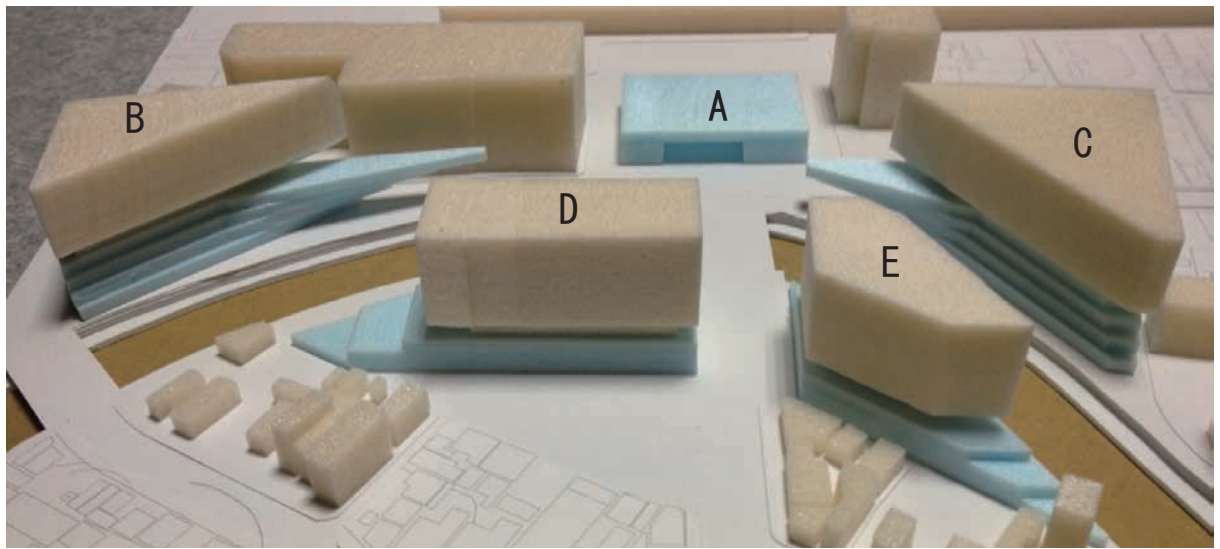


図 13. 全体計画

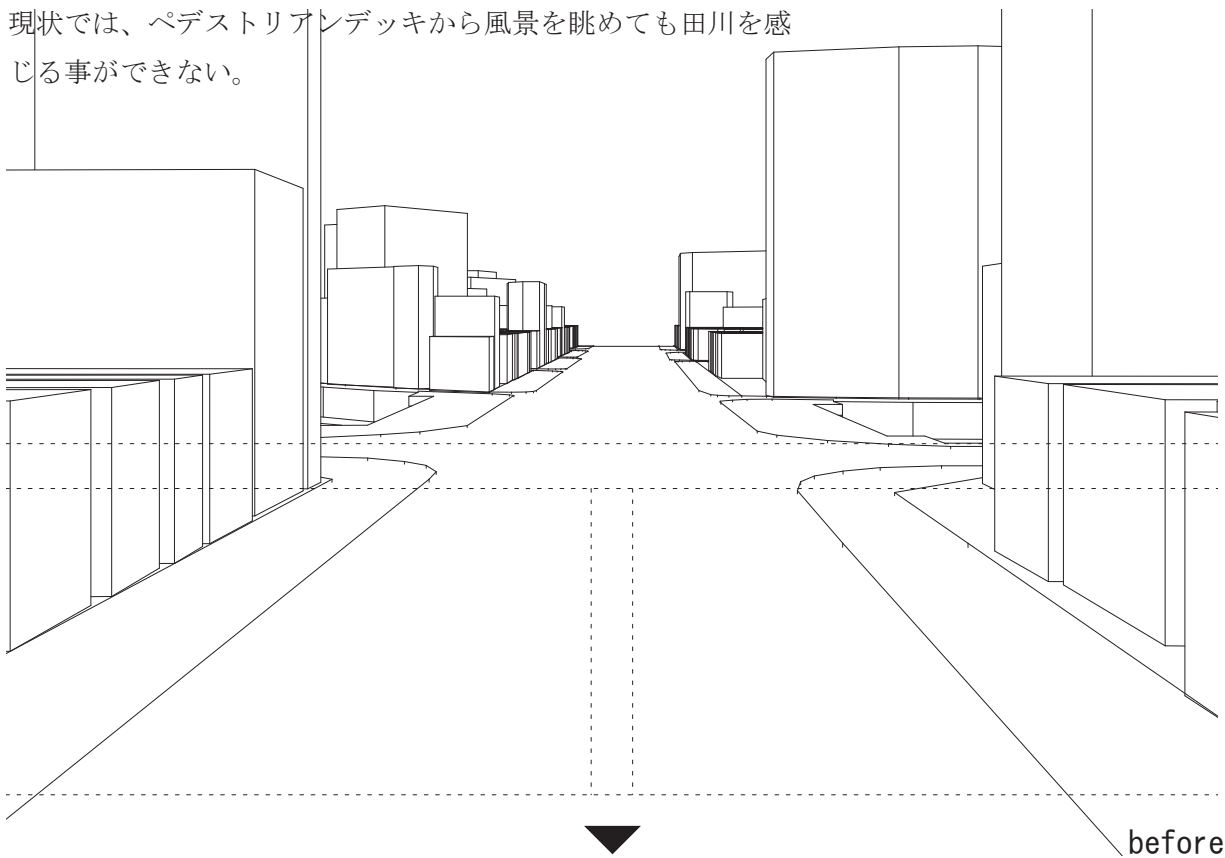


A	B	C	D	E
図書館 (分館) 観光案内所 商業施設	1~4F: 図書館 (11,600sqm) 5~12F: 業務施設 (22,600sqm)	1~4F: 美術館 (15,000sqm) 5~11F: 業務施設 (28,200sqm)	1~3F: 商業施設 (11,700sqm) 4~12F: 集合住宅 (21,000sqm)	1~3F: 商業施設 (7,200sqm) 4~11F: 集合住宅 (13,500sqm)
敷地面積: 6,000sqm 建築面積: 4,000sqm 建蔽率: 63% 容積: 6,000sqm 容積率: 100% (-500%) 河川空間: 1,200sqm	敷地面積: 3,800sqm 建築面積: 3,400sqm 建蔽率: 89% 容積: 34,200sqm 容積率: 900% (+300%) 河川空間: 900sqm	敷地面積: 4,800sqm 建築面積: 3,900sqm 建蔽率: 80% 容積: 43,200sqm 容積率: 900% (+300%) 河川空間: 930sqm	敷地面積: 7,700sqm 建築面積: 4,400sqm 建蔽率: 57% 容積: 33,700sqm 容積率: 430% (-170%) 河川空間: 200sqm	敷地面積: 3,000sqm 建築面積: 2,200sqm 建蔽率: 70% 容積: 20,700sqm 容積率: 690% (+90%) 河川空間: 400sqm

図 14. 容積移転による全体の容積と形態

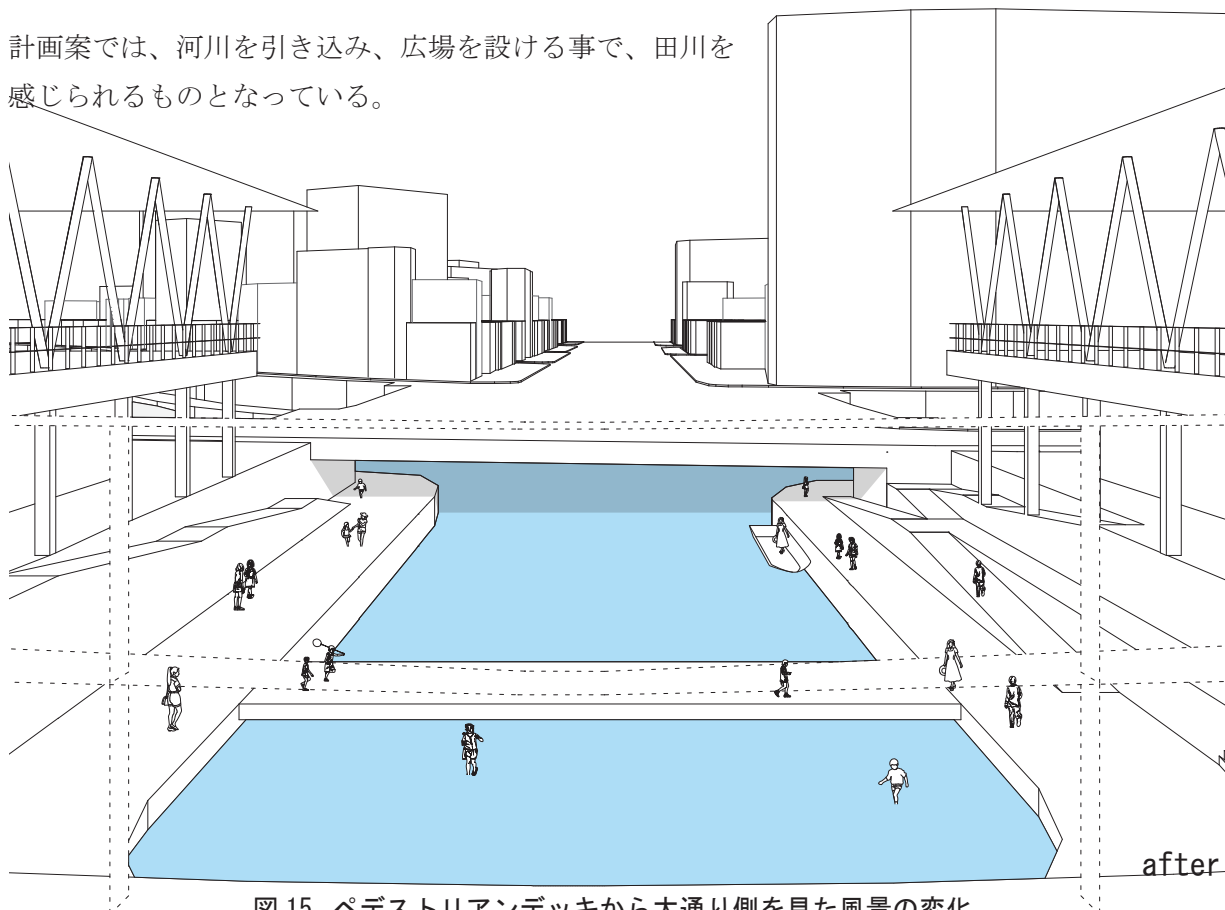
5. 駅前街区（siteA）における設計提案

現状では、ペDESTリアンデッキから風景を眺めても田川を感じる事ができない。



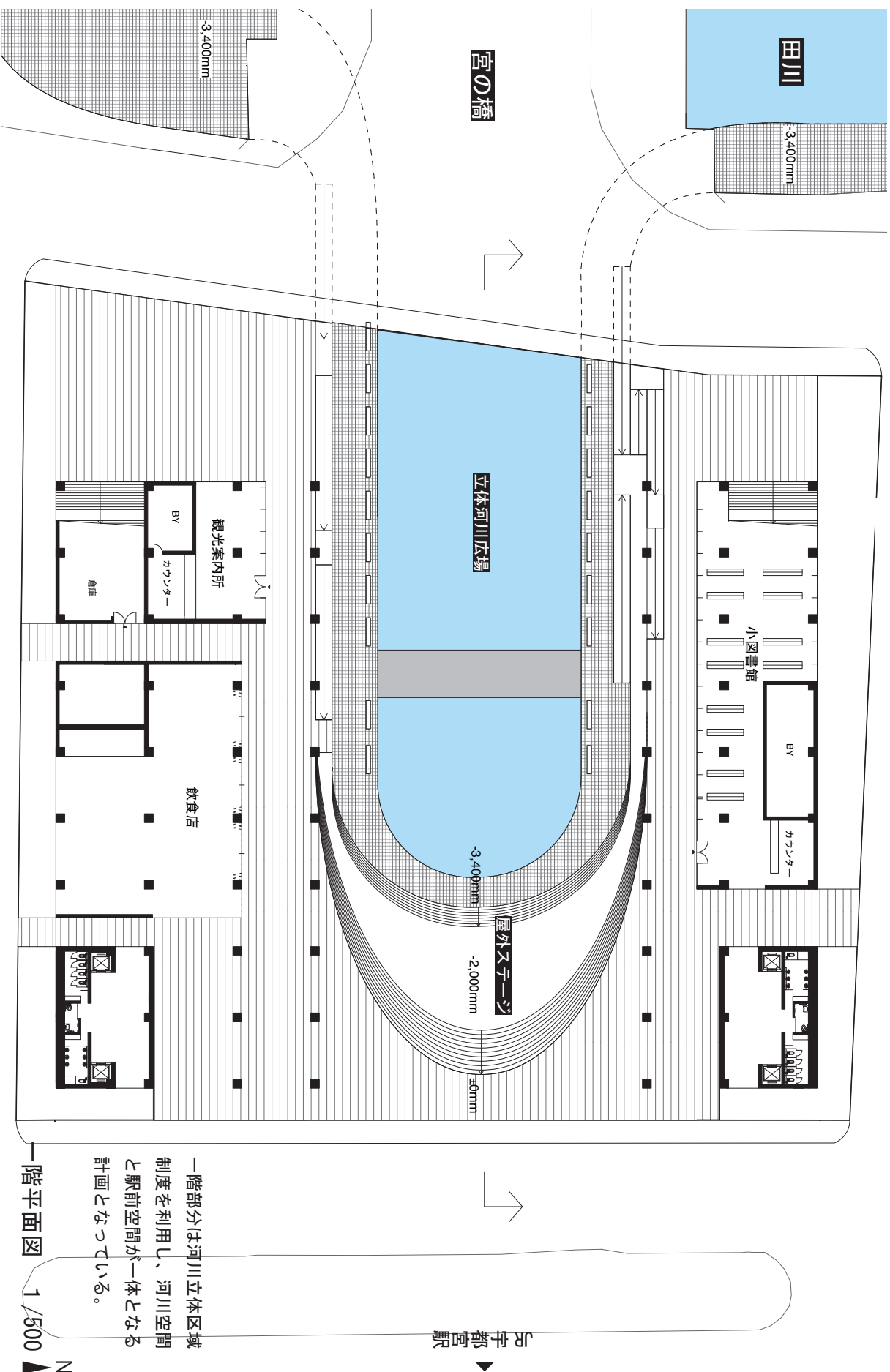
before

計画案では、河川を引き込み、広場を設ける事で、田川を感じられるものとなっている。

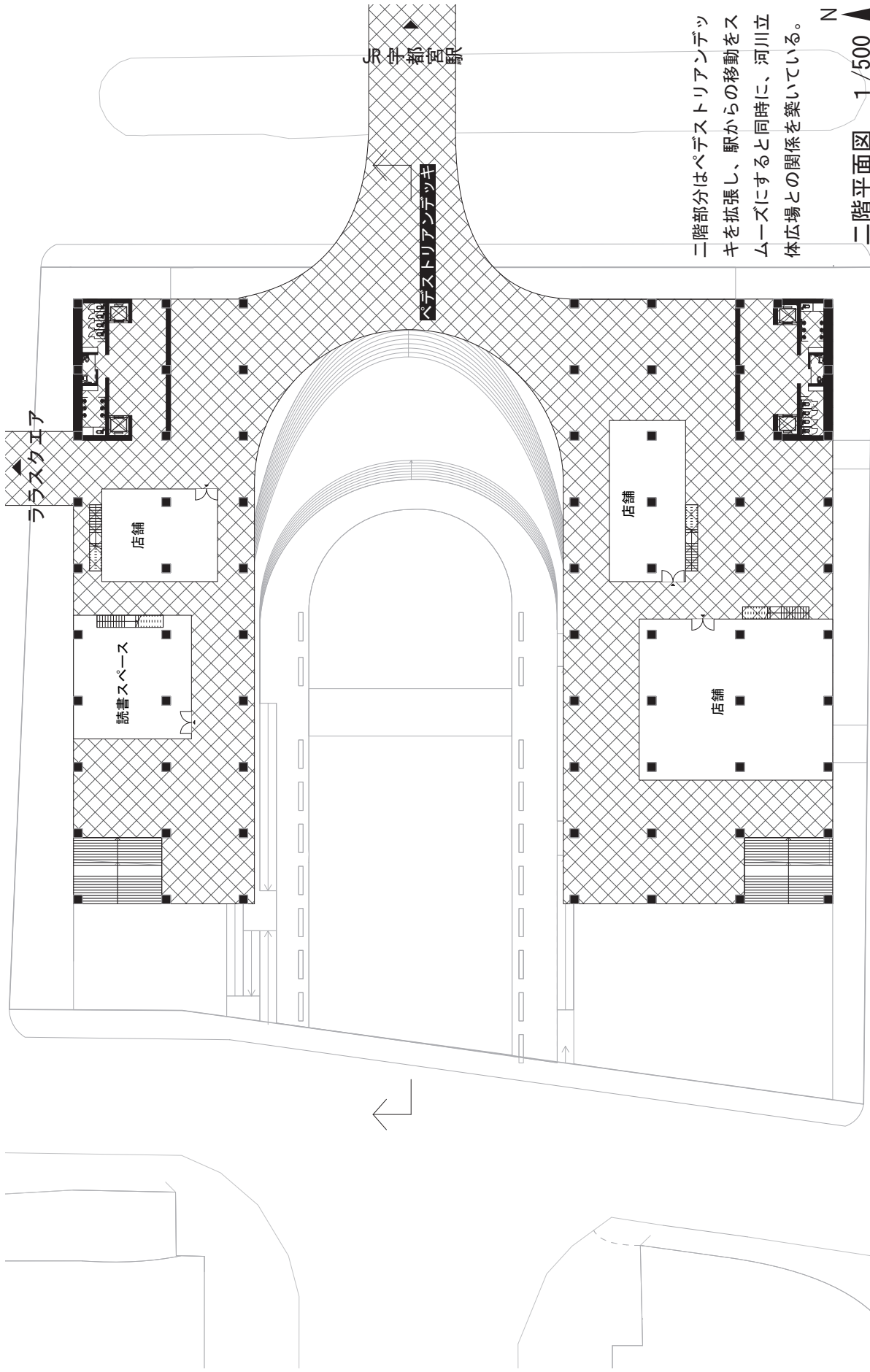


after

図 15. ペDESTリアンデッキから大通り側を見た風景の変化



一階部分は河川立体区域
制度を利用し、河川空間
と駅前空間が一体となる
計画となっている。



二階部分はペデストリアンデッキを拡張し、駅からの移動をスムーズにすると同時に、河川立体広場との関係を築いている。

二階平面図 1/500

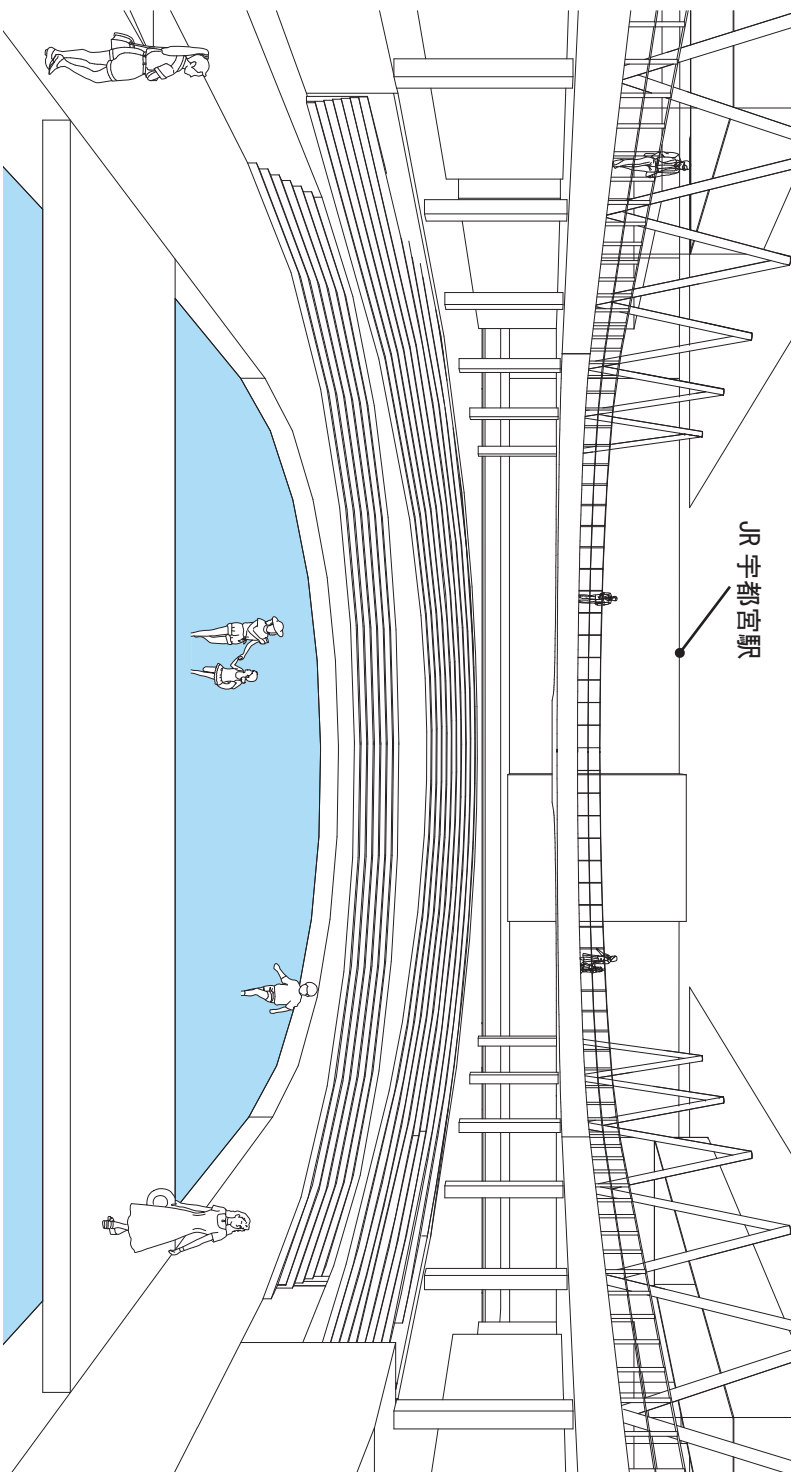
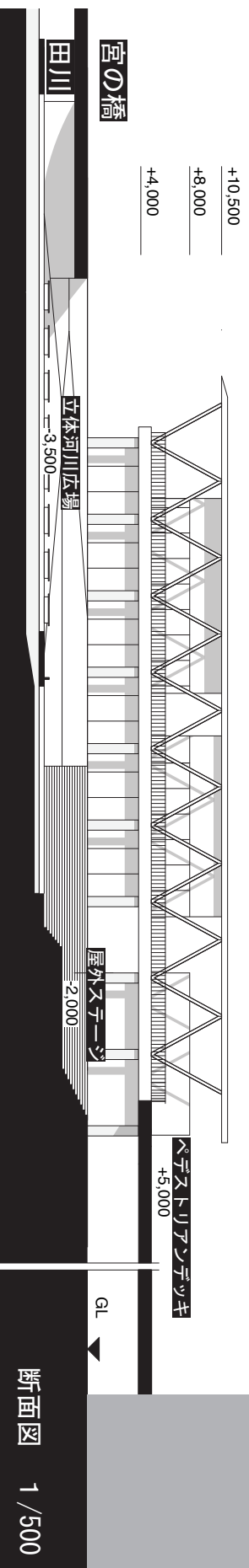


図 16. 立体河川広場から JR 宇都宮駅側をみる



6. まとめ

本計画では、二つの制度を同時利用する事で、河川空間の有効活用と土地の高度利用をはかりながら駅と河川空間を接続し、宇都宮らしい都市空間を創出した。